外国人鑑賞者を意識した作品制作

髙木茂行（聖雨）
Shigeyuki（Seiu）Takaki

本作品は、「日本の書２００人選～東京２０２０大会の開催を記念して～」という東京五輪開催に合わせた展覧会に向け制作したものである。したがって、鑑賞者の多くに外国人が含まれることを念頭に制作した。

表意文字である漢字で為される書は、東洋芸術の根幹にあり、書体・書風の変化と共に様々な変化を遂げてきた。表音文字と異なり一字一字に意味のある漢字は、字そのものに精霊を宿し、元来、神との交信のために用いられたものであった。エジプトのヒエログリフ、メソポタミア文明の楔形文字と同じ文字体系に分類される文字であり、外国の鑑賞者にはこちらの方が理解を得やすいかもしれない。この表意文字は、伝達の手段として視覚的には優れる反面、筆写には適さない。ヒエログリフや楔形文字が歴史の彼方に消えていった理由の一つにはこのことがあろう。最も原始的な表意文字は、ほとんどの文明の最初期の言語であったが、現在もなお用いているのは世界中でも東洋だけであると言っても過言ではない。当然、筆写に適さない表意文字は形を変えて現在に伝わってきた。漢字は最も古い篆書（甲骨文・金文など）から隷書・草書・行書・楷書と様々に姿態を変えてきたが、この書体の変遷こそが、書を芸術たらしめる大きな要因となった。各書体の性質の違い、文房四宝がもたらす様々な表現効果、そして何より漢字そのものに対する畏敬の念が書芸術の発展に繋がったのである。

本作品は、漢字の原始的な姿を有す篆書（金文）で書したものである。「我射心」（「Shoot the heart」）という平易な意味の文言で、文言の如く外国の鑑賞者を含む多くの鑑賞者の心にも響きやすいのではないかと思い選文した。また、象形文字を用いることで絵画的な雰囲気を感じていただくことも念頭に置いた。「我」はもともと鋸歯（のこぎりば）のある戈（ほこ）形の器の象形で、のちに本義と異なる「我」の意味に用いられるようになった。「射」は弓矢、「心」は心臓の象形であ

る。象形文字としても理解しやすいのではなかろうか。

書という芸術で書かれる漢字は、伝達手段としての言語を越えたところに面白さがある。すなわち筆線の妙味、墨の濃淡・潤渇、紙面における黒と白のバランスなどがそうである。特に筆線は、書を形作る構成物の中で最も重要なもので、遅速のリズムや太細、潤渇の変化は作品全体の印象を大きく左右する。これが書と絵画の大きな違いであり、書が時間芸術とも言われる理由である。卒意性を重んじる書は、絵画のように上塗りができない。

書は言語を素材とした芸術だから、何が書かれているか理解することは重要なことではあるが、読めなくても十分楽しめるものである。まずは、絵画を観るように鑑賞していただきたいと思う。

・用具用材

筆…兼毫筆

紙…南華箋

墨…墨液

我射心

105×225cm